



「薬を使わない医療」により 小児医療最大の問題の解決をめざす

【対談】にしむら小児科 西村龍夫医師 × 堀場製作所 杉山庸子

核家族化の進行、子どもの減少などを背景に、子育ての孤立化、育児不安の拡大が叫ばれて久しい。それは小児科医療の現場にも影響を及ぼしている。にしむら小児科の院長である西村龍夫医師に、HORIBAの医用システム事業推進部で製品企画の仕事をしている杉山庸子が、現在の小児医療の問題点についてお聞きした。

「治療より診断」「投薬より説明」が大切

杉山 「にしむら小児科」は、開業から11年が経過されましたが、その間、患者さんやそのご家族が求めるものに変化はあるでしょうか？

西村 インターネットなどが普及した関係もあり、親御さんの医療に対する知識が豊富になっていすね。診療方針について積極的に質問する方もいらっっしゃいます。

杉山 確かに私も子どもが病気になったときには、インターネットで病気について調べます。医療に関係する仕事をしていることもあり、テレビ番組で薬や病気の特集を放映するときは必ず見えています。

西村 そうですね。ただ、テレビ番組では死亡例や重症例だけが報道されがちなので、注意が必要です。一方的な情報は、かえって親御さんの不安感を

を増す結果になります。今、私たちには、できる限り「なぜこの症状が現れるのか」という理由を示した説明が求められます。

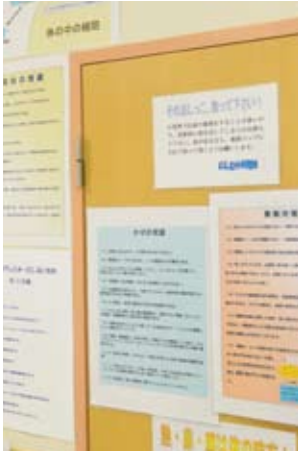
杉山 子どもが急に熱を出すとあわててしまいますが、しっかりと説明していただくと安心することができます。ところで先生はかねてより「投薬よりも説明が重要だ」ということを明言されていますね。

西村 はい。これまでの小児医療では、例えば「発熱患者には抗生物質を投与する」という診療が一般的でした。実際、親御さんもお薬が出ると安心されますしね。確かに細菌感染症の場合には抗生物質が有効なのですが、発熱の原因の多くはウイルス感染であり、抗生物質は効果がありません。私自身は不必要な患者への抗生物質の投与をなくしたいと強く思っているんです。例えば杉山さんは、子どもの頃、風邪のたびに病院にかかってい

ましたか。

杉山 私は祖母と同居していたので、風邪ぐら이었다ら「そんなのは寝ていれば治る」なんて言われた思い出がありますね(笑)。ところが、今、我が家は母の方が心配性なんです。大事な孫を預かっている、という気持ちが強からだと思うのですが。私も仕事をしているので、ほかのお母さん方と情報交換をする機会も少ないです。

西村 育児不安の度合いは強まっている、というのが率直な印象です。核家族化や少子化のほか、センセーショナルな医療情報による影響もあるでしょう。多様な情報が発信されること自体は良いのですが、特別な事例が一般的なもののように伝わると問題です。医師も極度に不安感の強い患者さんや親御さんには、どうしても過剰に薬を処方してしまいがち。子どもに薬を投与し続けていると、親御さんの方が「薬依存症」に陥ってしまうんです。医者にかかる、何か薬をもらわないと納得しない人が多い。特に、抗生物質の処方箋を医者



データという根拠が正確な診断を支える

杉山 「治療より診断」「投薬より説明」という先生の考えには、「えっ、そうだったんですか?」と新鮮であり驚きです。

西村 発熱やウイルスによる風邪の多くは、自然に治ることをじっくり説明するわけです。「風邪を治す薬を出しますよ」というのでなく、「自然に治りますから一緒に治していきましょう」と励ます。それを繰り返して、子どもに熱が出たときの対処法や「こういう経過で治る」ということを経験してもらうのです。そして、次に同じ病気になれば病院に来る前に、家庭で対処できるようになればいいと思います。

杉山 何かのときに先生がいてくださる安心を感じつつも、病気のたびに小児科に走って薬を求め

るのではなく、家族で乗り越えるということですね。

西村 そうです。私は抗生物質に限らず、必要のない薬はなるべく処方しません。ただし「診断」と「説



大阪府柏原市の閑静な住宅街にある「にしむら小児科」。地域医療の拠点として子どもたちの健康と親御さんの安心を支える(写真上)。院内の壁には、「かぜの常識」「不必要な抗生物質は有害です」など、親御さん、患者さんを啓発するポスターが多く貼られている(写真左)。

明」には、その根拠が不可欠です。

杉山 そのような先生が増えていいのでしょうか。現在、若い世代の開業医や救急現場などで、迅速かつ簡便におこなう検査および検査機器の普及も進んできています。

西村 おっしゃる通りです。所見による判断がもちろんベースですが、そうした機器による検査データが、もうひとつの重要な根拠になるんです。コンパクトな検査装置は、我々のような開業医にとってはとても有効なツールです。



杉山 先生が患者さんの傍らで迅速に検査できる装置を院内に整備されたきっかけは、どんなものだったのですか。

西村 勤務医時代は、発熱の患者さんが来院すれば抗生物質を必ず投与していました。発熱の原因の多くがウイルス感染であることは知っていましたが、先輩や同僚も同じように抗生物質を処方していたので、疑問を感じることはなかったんです。しかしMRSA^{*1}やPRSP^{*2}などの耐性菌(抗生物質が効かない病原菌)感染患者を診る機会が増え、市中にも耐性菌が蔓延している事実を目の当たりにして危機感を抱きました。耐性菌というのは、抗生物質の過剰投与によって生み出されたものです。そうしたなかで徐々に迅速な検査、そしてそのデータの重要性を意識し始めました。

杉山 にしむら小児科では、血液検査と炎症マーカー^{*3}を同時に測定できる検査機器を使用されていますね。

西村 基本的には、親御さん、患者さんに"安心の根拠"を提供するために活用しています。ただ、風邪かなと思い検査をしたらすごく悪かったというケースもあります。以前、発熱で来た1歳のお子さんがいたのですが、はじめは突発性発疹やウイ



杉山庸子 すぎやま ようこ
堀場製作所 医用システム事業推進部
事業推進チーム
神奈川県出身。1997年入社。医療用検査機器の製品企画を担当している。3児の母でもある。

医用機器の検査データが
安心の根拠になるんです

ルスによる風邪かと思っていました。ところが血液検査をしたら白血球の数が3万5000もある(通常は1万以下)。これはおかしいということで、血液の培養をおこなったら菌血症だった。菌血症は、細菌感染ですから抗生物質の投与が必要です。放っておくと、場合によっては髄膜炎を起こし、命にまで関わります。

杉山 その場で検査することで、すぐに異常を察知することができたんですね。

西村 そうです。菌血症にかかりやすいのは小さな子ども。つまり言葉で自分の症状を表現することができない年齢層です。ご紹介したのは稀な例ですが、このように命に関わるケースでも検査やデータが診断の役に立ちます。

検査データは発熱診療の地図

杉山 母親として3人の子どもを育てていますが、子どもはいつ熱を出すかわかりません。でも、仕事で会社を休むことができない状況もあり、すぐにお薬に頼ってしまいます。それに、お薬をもらって帰ってくると、おじいちゃん、おばあちゃんが安心という満足するんです。でも、その考え方は間違っていたのだと思うようになりました。

西村 そういっていただくと、こちらもお話のしがいがあります。もう少し続けさせていただくと、本当に子どもに必要なのは"予防医療"だということです。現在では、悪い病気の多くがワクチンで予防できます。悪い病気は適切に治療しないといけません。風邪ぐら이었다ら抗生物質は必要ありません。熱を出しただけで抗生物質をもらいに病院へ駆け込むようなお母さん、お父さんたちの不安をなくしてあげることが大切なんです。杉山 実は、子どもたちのかかりつけ医では、血液の検査機器が使われていません。もっと先生のように小さな子どものこと、医療全体のことを本当に考えてくださる先生が増えてくれたらと思います。

西村 悪い病気なのか、自然に治る病気なのかを血液検査でチェックするという考えをもっと浸透させる必要があるでしょうね。私は「発熱の

リスクマネジメント」が大切だと考えています。風邪に抗生物質をつぎ込むよりも、ちゃんと検査して診断しようじゃないかということです。すぐに抗生物質を投与する医療をつくったのは、基本的に医者

杉山 私は堀場製作所の医用システム事業推進部で仕事をしており、新製品の企画をしています。HORIBAに対するご要望がありましたら、ぜひお願いします。

西村 以前に比べると検査機器の技術はずいぶん進歩しました。私自身、こういう装置は喉から手が出るほど欲しかったです。検査データのない診療は、地図をもたずに目的地をめざすようなもの。HORIBAさんの検査機器もとても役立っています。今後のことを考えると、私の使っているコンパクトな装置では白血球を3分類^{*4}しか検査できませんが、好中球^{*5}の数を知りたいので、5分類^{*4}まで調べられるようになると非常に助かりますね。

杉山 ありがとうございます。本日先生に教えていただいたことは、お薬に頼っていた私には衝撃的なお話でした。お薬に頼らない医療の推進に検査機器が役に立っていることをお聞きし、検査の意義を再認識することができました。検査機器が医療に必要不可欠であることを認識することで、私たちもやりがいを感じますし、具体的な課題に取り組んでいくことができます。それに自社の製品が、医療の最前線で必要とされているという話



西村龍夫 にしむら たつお
にしむら小児科 院長
大阪府出身。県立奈良病院での勤務を経て、1998年に「にしむら小児科」を開業。「抗生物質投与基準と投与数の変遷」などの論文を発表し、薬を使わない小児医療の大切さを訴える。

は、やっぱり大きな活力になります。先生が提唱されている「薬を使わない医療」をサポートするために、私たちもいっそう努力を続けていきます。

^{*1} Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* ; メチシリン(抗生物質の名称)に耐性をもった黄色ブドウ球菌。
^{*2} Penicillin-resistant *Streptococcus pneumoniae* ; ペニシリン(抗生物質の名称)に耐性をもった肺炎球菌。
^{*3} 感染症、外傷などで引き起こされる炎症の診断に用いる血液検査項目の総称。
^{*4} 3分類とは、白血球をリンパ球、単球、顆粒球(好中球、好酸球、好塩基球の総称)に分類し、その比率を求めること。5分類とは白血球をリンパ球、単球、好中球、好酸球、好塩基球に分類し、その比率を求めること。
^{*5} 白血球の一種である顆粒球の1つ。盛んな遊走運動(アメーバ様運動)を行い、主に生体内に侵入してきた細菌、真菌類を殺菌する。

●Report

医療機器を取り扱う
海外グループ会社のCSR活動

フランス南部の都市モンペリエにあるホリバABX社[®]では医療機器を扱うメーカーとして、医療や健康に関わるイベントへの参加を積極的におこなっています。遺伝子性疾患のひとつである囊胞性線維症^{のほうほうせいせんいしょう}の研究基金を集めるイベント「Virades de l'espoir」(希望へのレース)へは2003

イベントへの参加を通じ、医療の質の向上や健康な生活を支援

年より毎年参加をしています。また、スポーツをしたいと願う障がい者へ競技用車椅子を贈ることを目的にしたハーフマラソンイベント「Les 20 Km de Montpellier」(モンペリエ20キロマラソン)へも参加を継続しています。

※臨床検査用機器・試薬の専門メーカー。1996年にグループ会社の一員として迎え入れました。

「Virades de l'espoir」に参加するホリバABX社の社員たち